

(や=山田 学) [☆★☆お返事★☆☆わたしは教育に関し、庄司和晃先生 (1929 ~ / 大東文化大学文学部教育学科名誉教授 / 全面教育学会研究会サイト

http://www1.odn.ne.jp/zenmenken2012 参照) と板倉聖宣先生 (1930 ~ / 日本科学史学会会長 および仮説実験授業研究会代表 / 仮説社サイト http://www.kasetu.co.jp 参照) に学びつづけてをります。

その庄司和晃先生から、この6月23日から7月3日までたて続けに、わたしへのご質問のお便りがありました。あなたの思想と活動の実際について確認したい、といふご主旨です。これはあくまで私的な問ひかけです。わたしからのお返事のみを公開いたします。(転記の際、引用部分は1行あけでなく、~にてはさみました。)

文中〈ものづくり進化論〉は JOMON あかのみいサイト〈健康平和研究〉画面にて「やまとことばの世界観と音韻の論理」は「理念集」画面にて公開してをります。『学問の転換』はわたしが1994年に自費出版した著です。(「店頭」画面参照)

(6月25日付山田から庄司和晃先生への手紙より) [6月23日付お便りをありがとうございました。ご質問にお答へします。

〈ものづくり進化論〉2 ペに書いた以下についてのご質問でした。

~
西欧民族などが概念してきた原子ないし素粒子と、日本民族が表象してきたもののはれ・雪月花・花鳥風月。研究や教育の現場において、この西欧など概念と日本表象の矛盾をどう解決していきませうか。

~
これはそもそも板倉聖宣先生のお為事^{しごと}を久しぶりに全体的にとらへ直したあと、板倉先生への真剣な手紙のなか^{なか}に書いた文言から発してみます。板倉先生は自著のうち『原子論の歴史 上・下』(仮説社2004年)をもっとも大切にされてゐるのでないかと、わたしが予想したからです。

わたしは TQ 技術を解明していくための中間報告として書いた「TQ 技術の理解へ」(弊サイト「理念集」画面内 / 以前にお送りしました。) 14 ペにかう書きました。専門家向けで少し難解ですが、引用します。「思索の方向」といふ節の冒頭です。

~
さて、月の公転と地球表面における生理現象ないし認識現象のあいだに、関係がある、関係があるらしい、という報告がさまざまにあります。TQ 技術をめぐるわれわれの関心からすると、地球・月系の場 (物体場・電磁場・酵素活性場・原子場・原子核場) と H₂O 分子団・酸素核・内酸素核 (他

の原子核の内核としての酸素核) のあり方との関連に注目していきたいです。

~
一方、『国家の品格』(新潮新書2005年)といふ著にて話題となつた数学の藤原正彦先生らがアーノルド・L・リーバー『月の魔力 増補』(東京書籍1996年)といふ翻訳書を出してをられます。月の公転と女性の生理など、本質的には未解明の問題に挑む書です。そして藤原先生は自著『国家の品格』143 ペに「... 私はいま、あらゆる理系の学問において、美的情緒こそ最も重要と確信しております。」と書かれました。(ただし、『国家の品格』の主張全体に関しては、賛成できかねる面もあります。)

数学史を大観すると、図形重視の時代とかず重視の時代があり、デカルト以降現在まではかず重視の時代です。デカルトがはじめて図形論の難問をかずにかかはる方程式により解いた (解析幾何学) からです。しかしそのデカルトの一面性などを、藤原先生らは問題にしてをられます。

この本質問題は、英語と日本語の問題にもからみます。「やまとことばの世界観と音韻の論理」16 ペにかう書きました。

~
... 英語の世界観は、常にかぞへる実体かかぞへない実体かを意識し、かぞへる実体は個か集りかを意識してゐます。世界の言語史上もっとも新しい類型・系統と考へられ

る英語の概念はかず的であり、逆にもっとも古い類型の残存と考へられるやまとことばの概念・表象はかず的でなく、図形的でせう。もののあはれ・雪月花・花鳥風月などの表象を発達させてゐます。その図形的な表象が無自覚に顕れつつあるのが今の漫画・アニメなどの流行でせうか。さらに芸術的な洗練も望まれます。これからのやまとことばないし日本語は、漫画・アニメなどと調和しそれらを活用するやう発達(伝統と創造)させていく。一方、ドイツ語や英語や数学やITなどに調和し対応するやう発達(伝統と創造)させていく。この二面方針の解決こそが日本社会の成熟方針の根幹でせう。また、諸言語調和ないし諸民族調和への入門でせう。

～

そして物理学史を大観すると、ニュートンの原子論とファラデーの場(field)論の矛盾をどう解決するかが、19世紀末の難問でした。今にして考へれば、〈ファラデーの場論〉から〈ニュートンの原子論〉を止揚すべきでしたが、実はアインシュタインが逆をやつてしまひ、〈ファラデーの場論〉を〈ニュートンの原子論〉(から延長した光子論など)により抑圧してしまひました。TQ技術の本質解明にかかはり〈酵素活性場〉といふ仮説を提出してゐるわたしどもは、ここが学問化と社会化の最大の壁となつてゐます。

このあたりのことを板倉聖宣先生とわかりやすく本格的に議論したく、前出『原子論の歴史 上・下』をわたしは徹底して読みこまうと、準備中です。

むろん、物質としては「雪」も「月」も「花」も原子から成ります。が、日本語「雪月花」はそんなことを主張したいのではないでせう。]

(6月28日付同じく) [6月26日付お便りをありがたうございました。ご質問にお答へします。

三浦つとむが論じたやう、矛盾の解決には二種類あり、闘争すべき矛盾と調和させていくべき矛盾とがあります。今問題にしてゐるのはもちろん、調和させていくべき矛盾です。

西欧の原子ないし素粒子といふ概念と日本の雪月花などの表象は異質である。この西欧概念と日本表象の区別と連関を解明していき調和させていくべきである。さう判断したゆゑ、両者の矛盾の解決、と表現しました。この西欧概念は自然に対して一面的でありこの日本表象にはまだ概念化されてゐない全面性がある。今のところさう考へてゐます。

TQ技術はその核心たるTQ処理といふ工程は安定した技術として確立してゐます。(少なくとも1993年から失敗経験がない。)が、この工程を今までの物理学や生理学により説明できない。今までの物理学や生理

学に対し修正と補足が必須と判断された。この修正と補足のためにこそ1994年時点で書いたのが『学問の転換』です。

TQ技術は健康・住居・食物流通・農業・環境といふ広範囲に応用可能と予想される。が、各分野の専門家と組み開発すべき応用の技能や技術はほとんど未確立です。この開発は西暦2100年までも続くと予想される。このTQ技術応用を19世紀からの電磁気・電磁場応用の歴史にたとへれば、まだ19世紀前半のファラデーの諸実験の段階です。

上記生命に関する応用分野は日本社会においても国際社会においても利権争ひが激しく、TQ技術はまだ芽の段階だが、すでに国際的な情報戦に巻き込まれてゐます。健康平和な現実認識を供給していく立場からこの情報戦に対応する広告の一環としてJOMONあかでみいサイトを建築しつづけてゐます。このサイトの記録内容はすべてTQ事業協会を保護し推進していくためにあります。

わたしが上記を無視しTQ技術のまだ狭い応用における営業により生活が安定し長寿の人生が実現したとします。しかし、わたしはそれではとても満足できないし、山田俊郎に対してもとても申しわけない、と思ひます。それではわたし個人の利己主義にすぎません。]

(7月2日付同じく) [6月30日付お便りを

ありがとうございました。

補足説明いたします。

西欧民族などが概念してきた原子ないし素粒子も、日本民族が表象してきたもののはれ・雪月花・花鳥風月も、認識対象は同じ自然や宇宙です。同じ自然や宇宙に対する認識が調和していかないはずはありません。

しかし、この西欧など概念は、TQ 技術の本質解明にかかはりわたしどもが提出してゐる仮説〈酵素活性場〉などの面を軽視し一面的です。一方、この日本表象は、全面性ありと思はれども、古代ギリシャ哲学と17世紀南欧西欧科学からの論理性要求にへられるまで、概念化されてはゐません。むしろ、この西欧など概念と日本表象の区別と連関を解明していく、予想と現実確認の過程は、時代を画する為事しごとです。人間社会の学問史においても、日本社会の思想史においても。したがって、わたしやわたし以外の人間がかかはり、何年かかるか、何十年かかるかわからない、為事です。

しかし、これを成していかない限り、西欧民族などと日本民族の本質的な意思疎通はない、ひいては人間社会の本質的な健康平和化はない、のではないでせうか。逆から言へば、本質的な意思疎通の要点は、この西欧など概念と日本表象の矛盾の解決にあり、とわたしはにらんだわけです。

『学問の転換』において、「TQ 研究会」と

〈生命促進性〉と TQ 技術については、139 ぺと 173 ~ 174 ぺにおいて言及してゐます。これの発行当時はまだ、TQ 技術の学問化と社会化をめぐる全体状況が観えず、へたなことを書けない、といふことで、ごく控へめな表現となりました。しかし、内輪の TQ 技術関係者（取引先など）へは、わたしの立場を明示する表現でした。

わたしは大学の理工系学部に学びながら、現代の科学や技術に深く疑問を持ち、疑問を解決するため、大学を中退してまで、人間社会の物理学史などを真剣に学びました。その上において、TQ 技術について深く体験すると、19 世紀からの電磁場応用史との区別と連関が強く意識され、TQ 技術の応用開発は西暦 2100 年までも続く、と予想するやうになりました。]

(7月6日付同じく)〔昨日の全面研例会にては、先生の若きころの夢中のご活動、「小学校の民俗学」とも称すべき、子どものことば採集録を公開してくださり、その迫力に一同、絶句してゐたやうです。

さて、前後しましたが、7月3日付お便りをありがとうございました。

さらに補足説明いたします。

16歳の時から三浦つとむに夢中になつてゐるわたしのやうな人間が、TQ 技術をめぐる現実の世界についてひろく深い感覚や表象なくして、当面の営業上や生活上の不利も顧みず、ここまで真剣になれるわけもあ

りません。そしてまたわたしは、自分の活動が何か新興の宗教（気休めの架空認識）と誤解されることを、もっとも危険視してをります。わたしどもの目的はあくまで、〈現在および将来の人びとの認識に健康平和な現実認識を供給していく事業〉です。もののはれ・雪月花・花鳥風月といふ日本表象を、もしもへたに概念化して死なせてしまふなら、もはや健康平和な現実認識の学問ではありません。認識学の初歩として、わたし自身の今までの半生の生活過程を考へると、この表象をわたし自身が十分にひろく深く身につけてゐるとも、考へられませんが、まづこの表象を十分にひろく深く身につけてゐるであらう、歴史上および現在の諸先達に、学び続ける必要があります。そして、一定の表象を殺さず、無理なく無駄なく活して概念化していく認識訓練については、わたしは川喜田二郎先生創始の KJ 法のとくに「表札づくり」といふ過程などを通し、わたしなりに訓練してきてをります。一方、この日本社会史上および人間社会史上はじめての概念化こそは、わたしどもの TQ 技術の本質にかかはると予想され、今までの物理学と生理学の盲点の本質的な概念化となる、とも予想してをります。

そもそも 1853 年の黒船来航以来、もっと言えば、1543 年の「種子島」以来、いはば人間社会全体の統治・経営勢力が、日本思

想を何とか「支配」しようとしてきたが、日本民族が素朴に純情すぎて、「支配」できさうでなかなか「支配」できない。さういふ勢力は、かなりとまどつてゐるのではないでせうか。逆に、日本思想から、ギリシャ哲学以来の諸学を「支配」できるはずもありません。日本思想も、欧米思想も、それぞれに不足してゐるのだ。かういふ立場から、無理なく無駄なく本質的に意思疎通していきたい。これがわたしどもの主張です。]

(や) [庄司和晃先生といふ、教育の専門家からの、この 6 月 23 日からのわたしへの教育は、誠に貴重なものでございました。深く感謝申しあげます。]